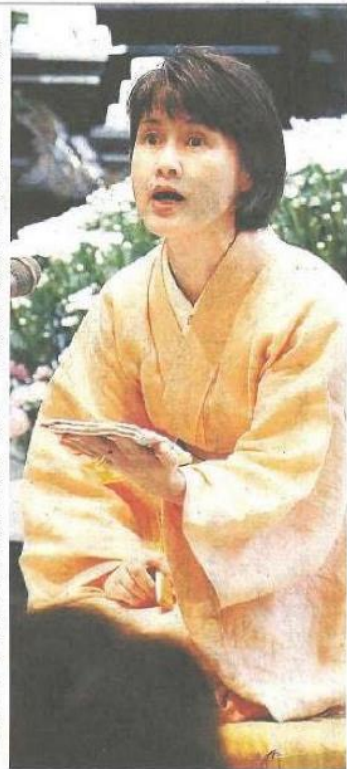


ひと

創作落語で「終活」を1万人に伝えた行政書士

いくしま きよみ
生島 清身 さん(53)



高座名は天神亨きよ美。落語を演じ、エンディングノートの書き方など人生の終わりへの「終活」を指南する。そんな講演を5年前から約140回。参加者は60〜70代を中心に1万人を超えた。演じる創作落語「天国からの手紙」は、相続争いをする3人の子どもに、天国の母から遺言書と手紙が届く。手紙には悔いなく生きたいという感謝の気持ちが進められていた、という人情話。「死への準備ではなく、人生を振り返り、これからの人生を自分らしく生きて」と語りかける。

思いの原点は、41歳から4年間の不妊治療。モニター画面の小さな受精卵を見た時、命の神秘、今生きていることの幸せを実感した。治療は実を結ばなかったが、「笑顔でハッピーに生きないと」と思えた。落語を始めたのは44歳の時。大好きな着物を着て行ける場として選んだのが、社会人向けの落語入門講座だった。自営業の夫を手伝うため行政書士の資格も取った。勉強のためセミナーに行くと、落語家が相続を扱った創作落語を演じ、そのあと専門家が解説していた。「自分なら一人できる」行政書士仲間のおつてで招かれた会で披露した落語が評判となり、以来、各地を飛び回る。子どもも楽しめる新作を構想中だ。「誰もが生きる意味があることを世代を問わず、伝えたい」

文・森本美紀 写真・堀英治

五自生前退位の攻陸